

## 10-2-1 感染症Ⅱ（その他）

## 療養病棟における胆道感染症の検討

医療法人社団三思会 くすの木病院 消化器肝臓内科

たかぎ ひとし

○高木 均（医師）、高草木 智史、小曾根 隆、横山 洋三、木澤 和子、丸橋 恭子

【目的】長期臥床、栄養摂取障害の高齢者において、特にTPNでは胆石を合併しやすく、胆のう炎を始めとする胆道感染の治療は問題となることが多い。学会のガイドラインでは重症度に応じた治療方針が示されているが、年齢、全身状態を明確な指針として取り入れたものではない。今回当院療養病棟入院中に合併症として胆道感染症を発症した症例の経過と予後に関して検討した。【対象および方法】2014年4月から2020年3月までの6年間に当院療養病棟に入院した745名の患者の中で、入院中に胆道感染症を合併した20名を対象として、原疾患、治療、予後について検討した。【結果】20例の内訳は男性13例、女性7例、年齢は59～97歳（平均81.4歳）。全例が廃用症候群、認知症を含む寝たきりの状態であり、療養病棟に入院する際には急変時の心肺蘇生や人工呼吸器管理等の集中治療を行わない方針で家族から文書での同意を得ていた。栄養方法は経口摂取4例、経管栄養2例、他14例はTPNであった。いずれも発熱や腹痛を契機に画像検査が行われ、18例が胆嚢炎（胆嚢結石合併6例、無石胆嚢炎12例）、2例が総胆管結石であった。全例で白血球増多、CRP上昇、肝胆道系酵素上昇を認め6例では顕性黄疸を呈していた。全例に抗生剤が投与され、うち4例で経皮経肝胆嚢穿刺排液術（PTGBA）、1例でERBD及びPTGBAが実施された。胆道感染症が死因となった症例は4例であり、残りの16例は一時的な状態悪化を克服し胆道感染から離脱した。PTGBAを実施した5例では全例が特に合併症もなく急性期を脱し改善していた。【結論】高齢、長期臥床の poor risk な患者では、胆道結石や胆道感染の合併は重篤になり易く一定数の死亡例が存在する。一方で胆嚢摘出等の外科的治療は基本的に適応外であるが、8割の症例は非手術的治療で改善が得られる事を示された。

## 10-2-2 感染症Ⅱ（その他）

## 療養病棟における中心静脈管理適正化の工夫

1 藤岡市国民健康保険鬼石病院 薬剤科, 2 藤岡市国民健康保険鬼石病院 看護部, 3 藤岡市国民健康保険鬼石病院 検査科,  
4 藤岡市国民健康保険鬼石病院 外科

くどう ともこ

○工藤 知子（薬剤師）<sup>1</sup>, 柳 千衣子<sup>2</sup>, 大澤 邦彦<sup>3</sup>, 工藤 通明<sup>4</sup>

【はじめに】療養病棟入院症例は、入院期間が長期で全身状態不良症例が多く、2020年診療報酬改定では、中心静脈カテーテルの「より適切な管理」と、「カテーテルに係る感染症の発生状況の把握」が求められる。当院におけるカテーテル感染防止の取り組みを紹介する。

【対象と方法】2020年4月から6月まで、毎月のカテーテル感染症の発生状況を検討した。カテーテル留置は、院内のガイドラインに基づいて、外科学会指導医が中心となる複数の外科医が、超音波検査の結果を参考にカテーテルを留置する。感染症の把握は、院内感染症対策チームがほぼ毎週の病棟回診の中で、発熱状況の確認、理学的所見、臨床検査データ等を参考に、カテーテル感染疑い症例を早期に把握し、可能であれば血液培養検査を実施し、カテーテルの抜去を主治医に提案する。合併症については、回診時に確認する。

【結果】検討期間の3ヶ月間で、カテーテル留置に伴う重篤な合併症は確認されなかった。カテーテル感染率は、4月：1.55%、5月：0.42%、6月：1.40%であり、敗血症等の重篤な合併症は確認されなかったが、カテーテル感染を疑う症例は、6例に確認され、5名はカテーテルを抜去した。このカテーテル抜去症例で、血液培養検査施行例、陽性例はともに2例で、ブドウ球菌が検出された。

【まとめ】当院では、中心静脈カテーテルの挿入は、複数のスタッフの検討に基づき、本人・家族の同意のもと、他の栄養維持のための手段がない場合に留置している。しかし療養病棟入院症例は、全身状態不良の症例や自己管理が難しい症例も多く、カテーテル感染率は高いと予測していた。これまではカテーテル感染頻度報告は稀であり、当院での感染率は従来的一般病棟での報告例と同程度であった。当院でも院内ガイドラインに基づいて、感染対策チームと協力しカテーテル管理を行っているが、感染監視を継続し、療養病棟でも感染率低下は可能であると考えている。

## 10-2-3 感染症Ⅱ（その他）

## 療養病棟におけるBLNAR持続伝播における取り組みと効果（中間報告）

新越谷病院 看護部

うえの まさし

○上野 真史（看護師）、鈴木 由香子

【目的】慢性期施設は多剤耐性菌の持ち込みが多く、感染防止対策が不十分であれば水平伝播が起きやすい環境にある。療養病棟において2019年9月に喀痰よりBLNARの新規発生を認め、2020年3月まで16件の新規発生を認めた。手指衛生剤使用量が最も多かった2019年10月が最も検出数が多く、環境を介した水平伝播が要因として考えられた。そこで、職員へ感染対策・意識調査アンケートの実施、環境チェック実施・結果のフィードバックを行い、水平伝播の減少を目的とし取り組んだ。

【方法】2020年4月に療養病棟職員26名（看護師17人、介護補助者9人）に対し、無記名式質問紙による標準予防策の自己評価や理解度についてアンケートを実施。2020年5月には、おむつ交換や吸引瓶洗浄、呼吸器ケアにおけるコンタクトポイントの伝播状況を蛍光塗料で確認した。その結果やアンケートで得た疑問点の回答をフィードバックし対策について解説した。また、多剤耐性菌が私たちにも及ぼす影響があることを伝え、感染防止対策の重要性を説明した。

【結果】アンケート結果から手指衛生5つのタイミングを理解していると回答したのは26.9%であった。環境整備を正しい方法で実施できていると回答したのは50%にとどまり、多剤耐性菌保菌者を把握していたのは42.3%であった。蛍光塗料の伝播状況は他の病室や汚物室で確認された。フロアマップを使用し、写真で示すと驚きの反応が多くみられた。2020年6月より新規発生は認められなくなった。

【考察】多剤耐性菌検出の情報は医師、看護師は概ね把握していたが、介護補助者への情報提供が不十分であったことが予測され危機的視点を持つことはなかった。情報を病棟職員全体で把握することは必要である。今回、伝播状況を直接可視化し伝達できたことは意識向上へ繋がったと考える。しかし、感染対策は持続的に行われなければ水平伝播はいつでも起きうるため今後の経過を把握していく必要がある。

## 10-2-4 感染症Ⅱ（その他）

## 手指衛生意識向上への取り組み ～本当の実施状況を把握し改善するには～

北九州若杉病院 看護部

さいとう ゆかり

○齋藤 由香理（看護師）、武石 志保、安高 貴子、渡邊 莉帆

「はじめに」6病棟は個室が多く重症な患者様や感染症の患者様の受け入れが多い病棟である。しかし、多忙の業務の為か、手指衛生を怠り次の行為へと移るといった行動パターンを目にする事が多かった。手指衛生は医療関連感染を予防する為の最も基本的な手段である。スタッフの手指衛生に対する意識の確認と現状を調査し研究を行った。

「目的」1. 手指衛生の現状把握 2. 手指衛生に対する意識向上 3. 手指衛生の遵守向上

「方法」1. 研究期間：2019年5月31日～2019年9月1日 2. 研究対象：北九州若杉病院6病棟看護師30名 3. 実施方法：本研究での手指衛生は擦式消毒での感染予防を目的とした研究とする。

「倫理的配慮」研究の趣旨や内容・本研究で知り得たデータ及び個人情報には本研究以外に使用しない事。また、結果を公表する場合は個人名が特定さないように配慮する事を説明し承諾を得た。

「結果」手指衛生の5つのタイミングについて周知しているスタッフは研究後には増加。5つのタイミングを参考に作成した項目別アンケート結果では、取り組み前後で、注射時・吸引時・検温時・オムツ交換時では増加し、配膳時のみ減少した。

「考察」吸引前後の手指衛生は擦式消毒薬の配置場所を患者毎の床頭台に変えスタッフの動線の短縮、消毒薬が視覚的に認識されやすい環境となった。オムツ交換と検温時は配置場所は変化してないが、勉強会や啓蒙活動が意識付けになり手指衛生回数増加に繋がった。しかし、配膳時に減少する要因として、環境設定を変化できていなかった為手指衛生回数増加に繋がらなかったのではないかと考える。以上の要因から、擦式消毒薬の設置場所をスタッフの業務動線上に変化させ、業務の流れをスムーズに行える環境設定の配慮が手指衛生回数増加させる一手段として非常に有効であると考えられる。今後の課題は、効果的な周知方法を確立させ、感染予防対策に大きな効果を出せるようにしていきたい。

## 10-2-5 感染症Ⅱ（その他）

手指消毒に対する意識調査  
～意識向上のためのアプローチ～

春日部厚生病院

うちだ みきこ

○内田 美喜子（看護師）、小林 祐子、江川 喜和子、中島 絵里

## 【はじめに（背景）】

医療現場において感染対策は、重要な役割を担っていると考える。しかし現場では、日々の業務に加え、度重なるナースコールへの対応に追われ、手指衛生が疎かになっている現状がある。今回、病棟内における手指消毒剤の使用に焦点をあて、看護師の意識調査を行い、知識が曖昧だった点についてアプローチを行ったことで、意識向上につながったためここに報告する。

## 【目的】

手指消毒に対する看護師の意識調査を行い、知識不足の有無と内容を明らかにし、それらの点についてアプローチを行うことで、意識向上を図る。

## 【対象と方法】

1. 研究期間：2019年6月～10月
2. 対象：当病棟に所属する看護師22名
3. 方法：①手指消毒に対するアンケート調査・分析  
②知識不足であった内容について、個別に資料を配布し、説明を行う。  
③「手指衛生5つのタイミング」について、ポスター掲示と呼びかけを行う。  
④アンケート調査・分析

## 【結果】

アンケート結果では、手指消毒を行う場面の回答にバラツキがあり、現在使用している手指消毒剤の効果を83%が知っていたが、そのうち62%は少しだけ知っているという曖昧な回答であった。

方法②と③の取りくみを行った結果、1時間あたりの個人使用量平均が1.7gから2.1gへ増量した。

## 【考察】

手指消毒の効果的なタイミングを理解していない為、せっかく消毒剤を携帯していても、必要な場面で消毒剤を有効に活用できていないケースがあるのではないかと考えた。今回、アンケート調査・資料配布・毎朝の声掛けを行ったことで、意識が変化し、行動変容につながったと考える。

## 【結語】

意識調査を行い、知識不足の点について教育を行ったことで、忙しい日々の業務の中でも、必要な場面で手指消毒を行えるようになった。今後も意識が継続できるように声掛けを行い、習慣化していくことが必要である。